

【特集2 文化フォーラム2002 in 台湾】



“虚擬實境科技藝術國際學術研討階會” 報告

◆文化フォーラム担当理事

仁科エミ

メディア教育開発センター

文化や環境、アート、人間の側からバーチャルリアリティ VR を考える試み「VR 文化フォーラム」は、東京都写真美術館（第1回、第3回）、屋久島（第2回）、バリ島（第4回）、長崎（第5回）をへて、第6回を迎える今回は台湾での開催となった。これまでの学术交流で培われてきた台湾の研究者の方々との関係を基盤に、台湾ご出身の高橋季穂 IAMAS 助教授のご尽力が実り、国立故宮博物院との共催というこれまでになくスケールの大きなフォーラムが実現した。故宮博物院にとっても、日本の学会との共催事業は先例の無いことだという。

このフォーラムではこれまででも、非学会員を含む多彩なスピーカによるインターディシプリナリなパネルディスカッションや参加者同士の意見交換といった“言語性情報”とともに、オーディオビジュアル作品展示やエクスカーションなどの“体験性情報”の体験を重視している。

今回、故宮博物院オーディトリウムでおこなわれたパネルディスカッションは、「情報と創造環境」「情報と建築環境」「情報とデジタルアーカイブ環境」という3つのセッションで構成し、建築、音楽、美術評論などの領域の論客をお招きして、刺激的な議論が展開された。また、パネルディスカッションの合間には、新しい試みとして、学会員の作品のDVDによる映像展示もおこなった。いずれも日本からの参加者（総勢50名）はもとより台湾側の百数十名の聴衆にも大好評で、一種のカルチャーショックの趣きすらあったようである。ちなみに本フォーラムの台湾での名称は“虚擬實境科技藝術國際學術研討會”という。「バーチャルリアリティとはなにか」という本質的問題提起とも結びついていて、興味深い。

エクスカーションでは、中国数千年の歴史が生み出した逸品ぞろいの収蔵品を誇る国立故宮博物院の見学がハイライトだった。良く知られているように台北の国立故宮博物院は、中国歴代皇帝のコレクションを中心に七十万点におよぶ収蔵品を誇り、中国文明の至宝秘宝の宝庫といわれている。殷・周時代の青銅器から清代の美術品まで、六千点をこえる青銅器、陶磁器、玉器、書画彫刻などの展示品は他の追随を許さない。これらの人為の極みともいべき芸術品の数々を、数千年の時空を超えて一望するというめくるめく感動のひとときをすごすことができた。バーチャルリアリティの研究者にとってはとくに、こうした本物の芸術品に接する体験は重要といえよう。ただしこうした体験性情報を、その空間を共有していない方々に伝達することはきわめて難しい。そうした体験性情報の共有化を学会内外に対していかに実現していくかが、VR 文化フォーラムの今後の大きな課題のひとつではないかと感じている。

最後に、今回のフォーラムの意義をご理解くださり多大なご支援をたまわった杜院長をはじめとする国立故宮博物院のみなさま、林品章デザイン学部長をはじめとする中原大学のみなさま、岐阜県立情報科学芸術大学院大学、ご協賛くださった森ビルアカデミーヒルズをはじめ、お力添えをたまわりました多くの方々はこの場をかりて厚く御礼申し上げます。

[プログラムは ページ]